論文の内容の要旨

氏名:阮 文軍(Ruan Wenjun)
博士の専攻分野の名称:博士(芸術学)
論文題名:原口典之の芸術－国内外での評価と作家イメージをめぐって－

本研究の目的は、原口典之（一九四六～二〇二〇）がいかなる美術家であったのかを明らかにすることである。

原口は日本の敗戦直後の一九四六年八月一五日に、東京湾の西側、アメリカ海軍の基地がある神奈川県の横須賀で生まれ育った。このような成長環境に身を置いた経験から、工業社会の特質を持つ作品を制作したことが、以後の美術の出発点となった。原口は一九六六年に日本大学芸術学部美術学科絵画専攻に入学し、大学一年生の時に初めて大規模な美術展に出展した。原口は《ツム一四七》（一九六六）で＜第七回現代日本美術展＞（東京都美術館、一九六六）に初入選・受賞し、美術家としての活動を始めた。そして、一九七七年、原口は五年ごとに開催される国際的な美術展＜ドクメンタ６＞（カッセル、ドイツ）に初めて日本人作家として選ばれ、鉄製の浴槽に廃油を流し込んだ《オイルプール（Matter and Mind)》（一九七七）が世界の美術界での衝撃的なデビュー作となった。この作品は、展覧会終了後はイランのテヘラン現代美術館に展示され、収蔵されている。続いて、パリ市立近代美術館でも＜第一〇回パリ青年ビエンナーレ＞（一九七七）に参加し、翌年にはドイツのデュッセルドルフで開催された「Galerie Alfred Schmela」（シュメーラ画廊、一九七八）を通じて海外での初個展を成し遂げた。

その後、原口は欧米と東洋で同時に活躍する美術家として活動し、二〇二〇年八月二七日に胃癌のため逝去するまで大量の作品を制作し、数百回展示に参加した。作品は、ニューヨーク近代美術館（アメリカ）やテイト・モダン（イギリス、ロンドン）など世界の主要美術館に収蔵されている。

日本大学芸術学部を卒業した数少ない国際的な作家として知られるが、原口は戦後の日本現代美術史の中で「もの派」あるいは「もの派の外縁」という文脈以外で語られたことはなかった。また、「もの派」としての位置づけについては、「もの派」の概念そのものの厳密性の欠如という点において、再検討の余地がある。

原口は、＜オイルプール＞のシリーズを代表作として、多数の作品を公開してきた。彼の作品制作は一九六三年から二〇二〇年までの間に行われ、その生涯において、出版物で掲載された約五〇〇件以上の作品を制作している。書籍や展覧会カタログでは、原口は「もの派」の作家として紹介されることが多いが、近年の「もの派」の研究や、原口の生涯を整理する過程で、原口の作品を「もの派」とは異なる視点から位置づけた研究も存在する。

原口の作品は様々な角度から読み解かれてきたが、一致した結論を見ていない。原口の活動をその全般に渡って俯瞰し、作品と言説を分析・検証した研究はない。

本研究の目的は、原口典之がいかなる美術家の作家像であったのかを明らかにすることである。そのために「もの派」とは何であったのかという一般的な議論のなかでの原口の位置づけに終始するのではなく、原口の制作意図に焦点を当て、彼の創作理念の変化を追う。原口の作品を公開された資料から網羅的に記録し、作品分析を詳細に行うことで、原口がどのように時代に反応し、どのように成功してきたのかについて考察する。そして、原口の作家としての軌跡を明らかにしたうえで、これまでの研究で、主に「もの派」関連作家として位置付けられてきた原口を新たな作家像から日本現代美術史に評価づける。これを通して、従来等閑視されていた「もの派」内部の複雑さに光を当て、そこから日本の戦後美術という文脈における原口の意義の多様性を提起する。

上述の目的を達するために、本論文は次のような研究手法をとる。

本論文では、作家論の手法を採用し、作家の制作の経歴を追い、作風の変化や発展を通じてその特徴や主題の連続性を探る。さらに、可能な限り広範で多数の言説を収集する。特に、第二章から第五章まで取り扱う原口の生涯については、原口以外の同時代作家の資料にも目配りし、あるいは同時代の横須賀市史などの文書も活用し、原口の作家像に関する資料を集め、検討を行う。

本論文全般に関連する美術家としての原口の作家像の検討は、サイニィや国立国会図書館、東京文化財研究所、東京国立近代美術館、東京都現代美術館、東京都美術館、日本大学芸術学部、原口のア

トリエ、各画廊など公開している資料などの資料に基づく、それらの資料を研究・批評史として年代順に取り上げる。

本論文は、大きく以下のような構成で論じることとする。

第一章「原口典之についての批評・研究史」では、原口に関する研究・批評史をたどりながら、本研究に関連する主要な先行研究を確認し、本研究が取り組むべき問題の所在を明らかにする。そして、本研究と関連する美術史研究の状況と先行研究を概観する。ここでは、原口の作品が、美術研究者によって様々な角度から読み解かれてきたが、一致した作家像を捉えるには至っていないことを確認する。

第二章以降は、原口の制作活動を第１期から第４期に区分して論じていく。

第二章「原口典之の第１期の作家活動」では、原口の初期作品の分析を通じて、そこから原口の第１期の作家活動を明らかにする。

第１期は一九六三年から一九六九年までの期間である。第１期の開始年は一九六三年である。この年は、原口が初めて作品を制作した年である。また、一九六九年に終了した。この年は、原口が前期の代表作《スカイホーク》を制作した年である。この期間の原口の本人によるキーワードは「原風景」である。つまり、自分の故郷に関する記憶を再現することと言える。

そして、第三章「原口典之の第２期の作家活動」では、原口の第２期の作家活動を明らかにする。

第２期は、一九六九年から一九七一年までの「もの派」が隆盛していた時期である。一九六九年の《Mechanic Eros》を皮切りに、原口は工業製品の素材の使用を始めた。このことから、一九六九年を開始年とした。この時期は、原口が大学卒業を控えていた時期であり、同時に「もの派」と重なる部分が多くあった。そして、原口は社会の隠喩を目指し、七〇年代初から空間や観者との関係性に焦点を絞った。一方、前章と述べているように、「もの派」の時代の原口は、同時代の「もの派」作家たちとは違う創作思想を明らかにしている。初めてオイルのプールを使用して制作した作品《Matter and Mind》（一九七一年）のため、一九七一年にこの第２期の終了年とみなす。

さらに、第四章「原口典之の第３期の作家活動」では、原口の第３期の作家活動を明らかにする。

第３期は、はじめてオイルのプール作品を誕生した翌年の一九七二年から一九九四年までの「原口らしい」作品群である。第３期の開始年は一九七二年である。この年は、原口が作品のキーワードに、「水平」や「垂直」などの物理的な言葉をキーワードとして登場させた年である。この時期の原口の作品の造形は、自立した構造と空間の発生を感じさせるものから、次第にメディウム自体の枠組みと限界を感じさせるものへと変化した。第３期後半の原口は、七〇年代後半のドクメンタ出展や「もの派」の亜流としての評価の確立に伴って、画廊との独占販売契約を結んでいた。

続く、第五章「原口典之の第４期の作家活動」では、原口の第４期の作家活動を明らかにする。

第４期は、一九九五年から二〇二〇年までの期間である。第４期の開始年は一九九五年である。この年は一九六三年から一九六七まで製作した最初の＜Ship＞シリーズなど「摸型」がまとめて作品化され、初期の《スカイホーク》、＜エアー・パイプ＞シリーズなど代表作が再制作された年である。この時期の原口は、過去に制作した主題を反復して制作するようになった。また、過去の作品を組み合わせて新しい作品とする試みも行っている。原口自身によって「反芻」というキーワードが述べられる時期である。一方で、前述の画廊との独占販売契約は終了していた。そのため、作品の再制作と販売に伴う著作権での訴訟問題が発生した時期でもある。

第六章「原口典之の創作活動の全容」では、第二章から第五章までに示した事実に基づいて、原口の生涯における様々な要因を分析する。そこでは、主に原口が自覚的な意図を持って自発的に行った創作、あるいは自覚的でありながら、画廊などの外部との関係で行わざるをえなかった創作、そして無自覚的に行った創作などの観点から、原口の作品を網羅的に論じる。

最後に総括として結論において、序章で提示した目的について、以上の六章にわたる考察で明らかになった点をまとめ、本論文が導きたい結論は次の通りである。

結論として、原口は戦後の日本近現代美術史において非常に独立した姿勢の作家であったため、一般的な評価枠組みの中での評価が難しかった。そのため、原口を評価する際には、特定の時代や派閥としての評価ではなく、独自の視点で高度経済成長期の日本を観察し、その時代から生まれる多様な社会の風景を作品に反映し続けた卓越した作家として評価すべきである。

原口の代表作は七〇年代の＜オイルプール＞と考える人が多いが、だからといって、それが彼の美術的創造の頂点だったというわけではない。周囲を観察し、考え、それを美術として提示することに

よって記憶を呼び起こす能力。原口の作品が提示するのは同時代的な体験であり、原口はその時代の空間体験を作品によって解釈し、伝えることができた。それは彼が創作した作品の中に、一貫して見ることができる。

実際には、原口の全ての創作活動と彼の活動の目的は、人々の空間認識を拡張し強化することである。最も重要なのは、個人の知覚能力、つまり人々が視る、感じる、考える能力を呼び覚ますことであり、これが周りの世界や時代の大きな出来事への原始的な感受性を豊かにする可能性がある場合である。

全４期にわたる長い創作活動の中で、原口の美術への理解は独立しており、美術を単なる思考や組み合わせで創造するとは捉えていない。彼は五感を用いて、世界と相互作用することを重視している。この相互作用は、記憶の感覚や物質など方式を通じて、観察対象が本来持っている周囲の空間やその時代の風景を空間に持ち込む。これが原口の芸術空間支配のあり方であり、また、支配する空間に入る人々に同じ造形感覚を共有させることである。